

Public Theology によせて

加山 久夫

1992年7月から11月にかけて、特別研究休暇の一部をボストンで過ごしましたが、この間に大統領選挙やコロンブス500年記念など興味深いイベントがあり、今日のアメリカ社会に直接触れる機会でもありました。しかしこれらについては他の機会にゆずることにして、以下に私がひとつの宿題としてもち帰ってきた標記のテーマについて一瞥したいと思います。

ボストン滞在中、アンドーヴァーニュートン神学大学院でキリスト教社会倫理を教えているマックス・スタックハウス教授との親交を得ました。同教授には多くの著作がありますが、最近、public theology について二、三の著書や論文を発表しておられます。実

は同氏にお会いする前に、ある日、テレビの対談のなかでハーバード大学神学部長のR. シーアマン教授が、かつての活力を失ったアメリカの教会が現代社会に広く発言しうる言葉を必要としていることを訴え、自らの試みをやはり public theology と呼ぶのを聞いていましたので、それについてもっと知りたいという願いをもっていました。

これまでキリスト教会は1960年代のキング牧師を中心とする公民権運動の実践から黒人神学を生み出し、ラテンアメリカの解放の神学や韓国の民衆の神学など、広く現代社会に連帯する解放のメッセージを語ってきました。スタックハウス教授はこれらを積極的に肯定しつつも、それらがともすれば社会構造を二極化（例えば白人と黒人、抑圧する側と抑圧される側等）したり、古いものはだめで新しいものはよいといった価値判断のもとで、例えば、民衆の伝統文化を十分評価してきたかどうかという点で問いかけ、神学をさらに開かれた広いパースペクティブのなかに位置付けようとしています。そこには環境問題や自然科学との対話なども課題となります。その際、public theology は、アカデミック・コミュニティや現代社会に通じるかどうかというテストに込めうるものであるとともに、教会で語りうるかどうかということも問われなければなりません。このことはまさしく日本の文化や社会の中で、特に大学という場でキリスト教に求められていること

ではないかと思えます。しかし、
そもそも‘public’をどう解し、
日本語にすることができるのかと
考えてみると、これが実に厄介な
のです。私たち日本人は、‘公’
は‘私’の反対概念として、つい
‘御上’を連想してしまいます。
かといって、‘公共’や‘公衆’
や‘社会’も十分ではないようで
す。このことで頭をかかえる私に、
「公園」を連想してみてもどうか
というのが同氏の示唆でした。そ
れは一部の人だけのものか、それ
ともすべての人に開かれた場かど
うか。つまり、〈現代のアレオパ
ゴス〉としての神学が求められて
いるのです。

(かやま ひさお

所員、キリスト教学)